

## 事例集

## ～事例検証その1～ イノシシによる死亡事故例

以下の事例は、イノシシに襲われ重大な死亡事故に至ってしまった代表的なケースである。死亡事故に繋がるケースでは、咬傷による出血性ショックによるものが多い。イノシシが突進してきた際に狙われやすいのが脚で、特に内腿の動脈を傷つけられないよう注意が必要である。

事例 01 (産経 west 160215)			
地域	愛媛県八幡浜市	被害者	80代男性
現場の環境	山中		
事故概要			
午後6時25分頃、農作業のために山中の畑に向かった男性が、山中で血を流して倒れているのが発見された。男性は病院に搬送されたが死亡が確認された。男性は、全身に噛まれた跡があり、死因は出血性ショックであった。傷は牙で噛まれたような形状で、胸や腰、脚等に複数認められた。			
受傷の程度			
出血性ショックにより死亡			
事故後の対応			
●警察署による見回りの強化、付近への注意喚起			

## ～事例検証その2～ イノシシの隠遁行動

以下の事例は、人がイノシシの存在に気が付かず、突然イノシシに襲撃された事例である。イノシシは、人が近づいてくると、物陰に隠れて、人が通り過ぎるまでやり過ごそうとする場合がある。このとき、人が近距離まで接近してしまい、飛び出してきたイノシシにより攻撃を受けてしまう場合がある。イノシシが生息している地域や、出没情報が挙げられている地域では、イノシシが隠れられそうな場所やその周辺に、常にイノシシが隠れているかも知れない、という意識を保ち、そのような場所には不用意に接近しないなどの対応が必要である。

事例 02 (産経新聞 160915)			
地域	神奈川県伊勢原市	被害者	60代男性
現場の環境	農地(栗畑)・里山近辺		
事故概要			
午後0時15分頃、親子とみられるイノシシ2頭に遭遇し、襲撃される。男性は「気が付いたら横にイノシシがいた」と話している。			
受傷の程度			
両脚の咬傷。全治3週間の重傷。			
事故後の対応			
●わな設置			

## ～事例検証その3～ イノシシの群れの特徴

以下の事例は、イノシシの群れに取り囲まれてしまった事例である。通常、イノシシは臆病な性格で、人が存在している事が分かっている状況でイノシシの方から敢えて向かってくることは稀である。しかし、イノシシにとっても意図しない人との遭遇を除き、イノシシの方から積極的に人を排除しようとする場合がある。特に、群れの中に幼獣がいる場合は、幼獣を守るために、親やあるいは周辺の成獣が群れとなって人を威嚇してくる場合がある。幼獣を見かけたら、近くに成獣がいる可能性があるため、けして追いかけたり捕まえようとしたりしないこと。

事例 03 (産経新聞 151117)			
地域	栃木県芳賀町	被害者	40代男性
現場の環境	農地(水田)		
事故概要			
午後2時25分頃、コンバインで稲刈りをしていたところ、イノシシ9頭に取り囲まれた。男性は携帯電話で警察署に救助を求めた。救助が現場に到着したころにはイノシシの群れは近くの林内に逃げた後だった。			
受傷の程度			
男性に怪我はなかった。			
事故後の対応			
●地元猟友会に出動を要請			

## ～事例検証その4～ イノシシの市街地出没と人身事故

以下の事例は、イノシシが突如市街地に出没し、連続して複数の人を攻撃した事例である。イノシシが市街地に出没する原因については、都市部の人による餌付けによるものがあるが、全てのケースで原因が解明されているものではなく、詳細は不明な点が多い。多くは、偶発的なことが重なって発生するものと思われる。例えば、林縁近くに出没したイノシシが、人や車両、犬などに驚いて市街地側に出てしまい、その後パニックに陥ってしまう事も有り得る。また、山と山の間を移動しようとして、市街地の一部を移動ルートとすることも想定される。しかし、これらに該当せず、本来イノシシが生息していない場所に突如としてイノシシが現れるケースも少なくない。

いずれにしても、市街地にイノシシが出没すると、大きな事故に発展する可能性が高いため、市街地に出没した際に備え、警察や役場で連携した対応マニュアルを準備しておく必要がある。また、出没情報の収集体制と迅速な注意喚起を行う実施体制の整備が求められる。

事例 04 (上毛新聞 161217)			
地域	群馬県高崎市	被害者	20代男性 10代女性(高校生)3名
現場の環境	市街地		
事故概要			
午前7時40分～8時頃、自転車で移動中の4名が次々にイノシシの体当たりを受け転倒した。現場はJR高崎問屋町駅近くで、周辺に住宅や商業施設が密集する地域であった。市街地に出てきたイノシシが、人や車と出くわしてパニックに陥り、付近を通行している人を襲った可能性があると言われている。			
受傷の程度			
自転車ごと体当たりされ転倒、膝を擦り剥く等の軽傷			
事故後の対応			
●市職員らが追跡し網を使って捕獲した			
●高校では全校生徒に事案を報告し、登下校中の注意を呼びかけた			

## ～事例検証その5～ 犬の散歩中のイノシシの行動

多くの事故は、河川の堤防上の道や、イノシシが生息している藪の近く、あるいは樹林に囲まれた神社の境内などで発生している。

避難区域では、住宅地でもイノシシが出没しているので、犬との散歩は極力避けるべきである。散歩する場合は、見通しが良く開けた場所を歩くなど、遠くにいるイノシシを発見しやすいルートを選択するなどの対応が求められる。

事例 05 (産経新聞 160218)			
地域	群馬県桐生市	被害者	60代男性
現場の環境	河川付近		
事故概要			
午前5時30分頃、犬の散歩中の男性の前にイノシシが突然現れ、驚いて転倒した男性に対し、イノシシが体当たりした。同河川沿いでは、前年の9月以降、イノシシの目撃情報が複数寄せられていた。			
受傷の程度			
前歯にひびが入るなどの軽傷			
事故後の対応			
●注意喚起			

## ～事例検証その6～ ワナが原因となった人身事故

全国的に、ワナにかかったイノシシを止め刺しする際の事故が多発している。これらは重大な死亡事故に発展するケースもみられている。

主に、くくりわなによる事故が多い傾向がある。くくりわなは、動物の肢をワイヤーで拘束して捕獲する道具であるが、拘束が不完全な状態であったり、ワナにかかってから時間が経っていたりすると、ワナから脚が外れる、あるいはワナが破壊される等して、イノシシが逃走する場合がある。特に、捕獲したイノシシを処理するために人が接近した際、あるいは第三者がワナの存在を知らずに接近してしまった場合に、イノシシが興奮して暴れ、突発的にワナが外れる場合があり、このときにイノシシの反撃によって受傷する例が多い。

このような事故を予防するためには、ワナの適切な運用（法的・技術的）について広く普及させることと、ワナの設置者の意識の向上及び技術指導が重要である。また、地域に住む住民にも捕獲について理解を深め、第三者との不用意な接触が発生しないよう、行政・捕獲従事者・住民それぞれの理解を深めることが求められる。

事例 06 （朝日新聞 161114）			
地域	群馬県桐生市	被害者	60代男女 2名
現場の環境	民家敷地内		
事故概要			
倉庫脇に仕掛けていたワナにかかったイノシシを、牧草用フォークで押さえ込もうとしたところ、ワナが外れて2名が反撃にあった。襲ったイノシシはそのまま裏山へ逃走した。			
受傷の程度			
両脚と左手の咬傷、出血性ショックによる死亡（男性） 腰の咬傷（深さ5cm）（女性）			
事故後の対応			
●猟友会による周辺パトロール ●注意喚起			

事例 07 (毎日新聞 161115)			
地域	群馬県桐生市	被害者	60代男性(酪農業)
現場の環境	庭		
事故概要			
<p>牛用の飼料をイノシシに荒らされる被害から、くくりわなを設置した。ただし、このわなの設置は市に事前申請がなく、県の許可基準を満たしていなかった(違法わな)。</p> <p>くくりわなにかかったイノシシを農業用フォークで押さえ込もうとしたところ、ワナが外れて反撃にあった。</p>			
受傷の程度			
死亡			
事故後の対応			
●市や県から農家に対する呼びかけ(適正な申請、わな免許の取得)			

事例 08 (産経west 160704)			
地域	熊本県山鹿市	被害者	80代男性、70代男性 2名
現場の環境	山林		
事故概要			
イノシシを捕獲するワナを確認するために山に入った際、イノシシに襲われた。			
受傷の程度			
<p>80代男性は襲われた弾みで転倒し背中と腹部を受傷した。</p> <p>70代男性は両脚に切り傷を負った。</p>			
事故後の対応			
●不明			

事例 09 (サンスポ 161006)			
地域	福島県塙町	被害者	80代男女 2名
現場の環境	農地		
事故概要			
わなにかかっていたイノシシに襲われた。			
受傷の程度			
太ももやすねを噛まれ重傷			
事故後の対応			
●地元猟友会により射殺			

## ～事例検証その7～ 庭先での襲撃

以下の事例は、昼間の民家の庭で発生したイノシシによる人身事故である。事故の詳細は不明であるが、民家周辺には少なくともイノシシが隠れられるような環境があったと推測される。1人目を襲った後、興奮状態に陥ったイノシシがその後次々と人を襲撃した。

このような住宅地における突発的な出没は、ほとんどの場合イノシシの存在を想定していないため、対応が困難なのが実情である。

事例 10 (産経新聞 160213)			
地域	埼玉県神川町	被害者	60代女性、50代女性、80代男性
現場の環境	住宅地(庭・玄関先)		
事故概要			
午前11時40分頃、民家の庭で60代女性がイノシシに腕や脚を噛まれて負傷。その後、420m離れた民家の玄関先で50代女性が脚を噛まれて負傷。さらにその後、路上で80代男性がイノシシに飛びつかれ、口や脚を噛まれて負傷。			
受傷の程度			
全員が病院に搬送された。			
事故後の対応			
●警察、猟友会が出動し周囲を捜索			

<参考> イノシシと人獣共通感染症

1. ダニ媒介性感染症

人獣共通感染症とは、人と人以外の脊椎動物との間で伝播する感染症のことであり、ダニによって媒介されるものもある。福島県では、避難区域にもイノシシの生息が拡大しており、イノシシに寄生したダニによる感染症への罹患リスクが高まっていると考えられる。そのため、以下のようなダニ媒介性感染症に注意が必要である。



吸血中のマダニ

注意すべきダニ媒介性感染症

病名	症状
重症熱性血小板減少症候群 (SFTS)	発熱、消化器症状、頭痛、筋肉痛、神経症状、出血症状など。重症例では多臓器不全で死亡する場合もある。
ダニ媒介性脳炎	重篤な急性脳炎で死亡する場合もある。
日本紅斑熱	発熱、発疹、マダニによる刺し口が特徴的。頭痛や倦怠感を伴う。
ツツガムシ病	発熱、発疹、ダニの一種であるツツガムシによる刺し口が特徴的。頭痛や倦怠感、リンパ節の腫脹などを伴う。治療が遅れると、致死率が高まる。
Q熱	急性期はインフルエンザ様症状や肺炎、肝炎などを示し、心内膜炎を主徴とする慢性型に移行する場合もある。適切な治療をしない場合、致死率が高まる。
ライム病	遊走性紅斑、神経症状、心筋炎、髄膜炎、関節炎など。
野兔病	発熱、頭痛、筋肉痛、関節痛、リンパ節の腫脹と疼痛、膿瘍、潰瘍など。

(参考) 国立感染症研究所ホームページ

ダニ媒介性感染症以外では、ヒゼンダニの皮膚への寄生による「疥癬」という寄生虫病があり、人では強い痒覚と丘疹性皮疹が現れる。犬や猫に散漫性脱毛や皮膚炎を起こすため、ペットへの感染にも注意が必要である。

● 予防法

・ ダニに咬まれないようにする

ダニは、野生動物が出没する環境に多く、民家の裏山や裏庭、畑、あぜ道などにも生息している。このような場所に入る際は、できるだけ肌の露出を少なくしたり、ディートやイカリジンを含むダニ忌避剤を使用したりすることで、ダニの付着を防ぐことが重要である。

・ 野外で活動した後はダニの付着を確認する

体や衣服にダニが付いているかどうか確認する。すぐに入浴して体を洗い流し、新しい服に着替える。

● もしマダニに咬まれてしまったら

吸血中のダニを無理に除去すると、ダニの口器が皮膚の中に残り、化膿することがあるので、皮膚科等の医療機関で適切な処置を受ける。発熱等の症状が認められた場合には、速やかに医療機関で診察を受け、適切な治療を受ける。このとき、野外等で活動しマダニに噛まれた可能性があることを伝えると速やかな治療を行うことができる。



## 2. イノシシ肉の喫食やイノシシとの接触により伝播する感染症

野生動物は、臓器、筋肉、皮膚、体毛などにウイルスや細菌、寄生虫などの病原体を保有していることがあり、病原体の感染様式は、ダニを介すものばかりではない。一般的にイノシシから伝播するおそれのある感染症には、以下のようなものがあり、注意が必要である。

### イノシシの肉や内臓の喫食により伝播する感染症

病名	症状
E型肝炎	潜伏期は15～50日（平均6週間）。悪心、食欲不振、腹痛等の消化器症状を伴う急性肝炎。褐色尿を伴った強い黄疸が急激に出現し、これが12～15日間続いた後、発症から1カ月後に完治する。妊婦で劇症肝炎の割合が高く、致死率が20%にも達することがある。
ドロレス顎口虫症	皮下に移動性の腫瘍や線状発疹が発現（皮膚爬行症）。眼や脳脊髄に迷入して重大な障害を与えることがある。犬、猫へも感染するので、ペットへの感染にも注意が必要である。
ウェステルマン肺吸虫症	発咳や喀痰などの呼吸器症状。脳、皮下組織、腹腔臓器、眼窩に迷入することがある。脳の迷入症例では、頭痛、嘔吐、てんかん様発作、視力障害などを示し、死亡することがある。犬、猫へも感染するので、ペットへの感染にも注意が必要である。

これらの感染症は、加熱不十分なイノシシの筋肉や内臓の喫食が原因となる。そのため、感染症を予防するには、イノシシをはじめとする野生動物を喫食する際に十分に加熱調理することが重要で、生食は厳禁である。また調理等で使用した器具も十分に洗浄しなければならない。

### 気道分泌液や糞便を介して伝播する感染症

病名	症状
ブタインフルエンザ	季節性のインフルエンザと同様の症状。発熱、発咳、喉の痛み、体の痛み、頭痛、悪寒、倦怠感など。

ブタインフルエンザの予防方法としては、手洗い・うがいの徹底が大切である。手洗いには石鹸を用いるとよい。アルコールを含んだ手指消毒薬も効果的である。またイノシシやブタはウイルスを保有している可能性があるため、イノシシやブタに触れた手で、眼や鼻・口に触ることは避けるべきである。

また、生活範囲内でイノシシの糞尿（I基本知識参照）を発見した場合は、絶対に素手で触らず、スコップを使って地中に埋めるか、離れた場所に移動させること。



**福島県避難 12 市町村イノシシ被害対策技術マニュアル**

(福島 12 市町村におけるイノシシ被害対策の広域連携に関する調査業務)

平成 30 年 (2018 年) 3 月

発注者 復興庁

業務請負

株式会社野生動物保護管理事務所

〒194-0215 東京都町田市小山ヶ丘 1-10-13